

企業が選ぶ大学

企業のターゲット大学激変
SNS発信で大学「新」序列

向井康二 白熱レッスン
中学受験は脱・大学付属

AERA

2021.7.12 No.31

増大号 アエラ

特別定価 470円

アイドル

ラウール

企業が選ぶ大学
選ばれる大学

「巻頭特集」

企業にも学生にも

人生と仕事の決定権を取り戻す

「かままずようは」

人が都市使う未来

海辺のまち、鎌倉・逗子・葉山が、東京からの転出先として大きな注目を集めている。名付けて「かままずよう」。超高層タワーのないこの場所で、いま、「会社員一択」ではない、多様な生き方と仕事観が生まれている。

ジャーナリスト 清野由美



隣接する工房で作るジェラートは、素材を吟味。店頭にはローズマリーハニーやバターピーカンなど、魅力的なフレーバーが並ぶ。左が松本愛子さん、右奥が純さん

「GELATERIA SANTI」は昭和の木造家屋。老朽化していたが、古い建物を残した。改装を手がけたのは「Minamicho Terrace」の日高仁さん。店の真横を江ノ電が通る



「昨年の5月、6月はステイホームで需要が冷え込みましたが、リモートワークが浸透した夏から、物件が動くようになりました。今は2年前の2、3割増しの価格でも、買い手、借り手がついています」

そう語るのは、JR鎌倉駅西口で不動産業「COCO-HOUSE」を営む西本学央さん(48)だ。

鎌倉・逗子・葉山の人気が コロナ禍で再燃した

コロナ禍が続く中、神奈川県は東京からの転出先として人気が高い。中でも湘南の海沿いにある鎌倉、逗子、葉山エリア——名付けて「かままずよう」は、現在、そんなミニバブルが生じるほど、注目を集めている。

理由の一つは、西本さんの指摘する

通り、コロナ禍で出社頻度が減ったこと。週に1、2回の通勤なら、多少時間がかかっても、海、山があり、昔ながらの商店街が息づくまちが人々を惹きつけるのは、不思議ではない。

だが、「かままずよう」人気はコロナ禍で急激にわき起こったものではない。このエリアでは、10年前、東日本大震災の直後から、「ワークライフ」の動きが活発化し、シヨップオーナー、マイクロ起業家、フリーエージェンツから「会社員」ではない人たちが、自由で自律的な生き方を実践してきた。「ワークライフ」とは、ワーク・ライフ・バランスのさらに先を行く概念だ。「ワーク(仕事)」と「ライフ(人生)」を分けて、労働時間を切り売りするのではなく、両者を不可分のものとしてとらえる点に革新性がある。その価値観がコロナ禍を経て、いよいよ時代に



フィットしてきた。

江ノ電「鎌倉」駅のホームから見える御成通り界隈は、昭和の雰囲気が残るタイムスリップゾーンだ。その一角に工房を隣接したイタリアンジェラート店「GELATERIA SANTI」がオープンしたのは2018年のことだ。オーナーの松本純さん(36)、愛子さん(36)夫妻が、ジェラート作りと経営にあたる。

起業前は、ともに公認会計士として都心にある大手監査法人に勤務していた。ジェラート店とはギャップのある前職だが、二人とも新卒で入社した時から、「就社」という感覚は持っていなかったという。

入社8年目に長い休暇を取って世界旅行に出かけ、ローマで食べたジェラートのおいしさに心を奪われた。その勢いでポロニーヤにあるジェラート学校の短期講座に通い、帰国後に退社、起業に進んだ。店を開くなら、コミュニティの交流が盛んな鎌倉、と以前から考えていた。

「会社員時代は、目の前の数字と格闘しながら、自分が誰に貢献しているのかわからなかった。人間的なコミュニケーションションへの渴望があって、ショコッブオーナーに行き着いたと思います」(純さん)

昨年は伊豆のホテルにジェラートとパンのショップも出店し、来春には湘

南に新たな工房を設けて、コーヒーや焼き菓子も販売する。この5月には次男が誕生し、公私ともに充実の日々だ。「店では目の前でお客さまが『おいしい』と喜ぶ姿を見ることができ、それが私たちの幸せにつながっています」と、愛子さんも言葉を添える。

高徳院の大仏さままで有名な長谷は、鎌倉屈指の文化地区だ。この一角にある日本家屋でシェアハウス「甘夏民家」と、週末カフェ「雨ニモマケズ」を運営するのは、不動産会社「Safari B Company」の経営者、横山亨さん



「甘夏民家」は築80年以上の邸宅。庭にあった甘夏みかんの木から命名。庭の手入れも自分たちで行っている(写真上)。1階では週末限定でカフェ「雨ニモマケズ」を開く(下)

(48)だ。甘夏民家は妻の孫崎延さん(46)の行政書士事務所と横山さんのオフィス、そして二人の自宅も兼ねる。拠点を多機能にすることで、歴史ある邸宅の購入と維持管理の費用をまかなっているのだ。

「風情ある木造家屋を暮らしながら守り、町並みを次代に引き継ぐ方法はなにか。それを考え抜いたスキームがこの家です」

会社の「奴隷」をやめて 愛着ある物件を扱う

横山さんは10代後半から世界放浪を繰り返して、20代後半で大手不動産販売会社に就職。営業マンとして、500軒以上の不動産売買に携わった。その中で、いいとは思えない物件が、儲けのために売られていく場面をたくさん見た。

「何も言えない自分が、会社の奴隷のように思えることがありました。『売ればいい』のではなく、『ここに住んで本当によかった』と言われるものを売りたい。葛藤の中から、自分の仕

事のやり方を真剣に考えるようになったのです」

その先に鎌倉で甘夏民家との出会いがあり、8年前に独立して「大家業」をスタートした。現在は都内と神奈川県に計6軒の物件を所有し、店舗やシェアハウスなどを経営する。いずれも愛着のある物件で、自ら手入れをしつつ、自由な時間を作って、「旅する大家」として世界中を回っている。

松本さん、横山さん夫妻の「ワークライフ」は、戦後日本を縛っていた「会社員一択」から抜けて、まちの中で自己決定を行っていく試みでもある。

戦後、日本では高度経済成長とベビーブームを背景に人口が増加。住宅が慢性的に不足して、宅地開発は都市部から郊外へと際限なく広がっていった。ところが2000年代に入ると、経済が停滞し、少子化・高齢化、人口減少が進行。若い世代は「職住近接」を志向して都心に回帰し、かつてのニュータウンは地域まるごとが老いて、空き家問題にも悩むようになった。

背景が反転する中では、働き方と仕事観、人生のとらえ方、価値観にも転換が必要だったはずだ。しかし、高度経済成長の原理が消えた後でも、「会社員」という一つの選択肢は強固に人々を縛り続け、都市の形態も硬直化していった。

その象徴が10年代に続々と登場したタワーマンションだ。資本主義経済でタワーマンションが華やかに演出される陰で、終身雇用の機能不全、通勤電車の苦痛、価値観の転換という切実な課

古い漁村とマリナーの都会的な眺めが混在する逗子市小坪。ここで1級建築士事務所を主宰する建築家、関東学院大学准教授の日高仁さん(50)は、かつて首都圏郊外のスマートシティ開発に参加していた。エネルギー利用や地域のセキュリティなどの先端技術を盛り込んだプロジェクトは刺激的だったが、その時に、大資本による開発の限界も痛感した。どんなに新しいコンセプトを謳っても、結局、まちの様態は「効率的な」超高層ビルに帰結してしまうからだ。

「それでは日本社会が直面する人口や経済の縮小に対応できない、という根本的な疑問を抱きました。むやみに新しいビルをつくらなくても、地域に残る建物を使って、昔ながらのコミュニティを損なうことなく、次世代へつないでいくことはできるのではないかと。その疑問に対する答えを見つければ、12年から自宅で週末だけのカフェ「Minamicho Terrace」を妻の直穂子さん(50)と始めた。小坪は駅からは遠く離れ、家のある山の中腹は、車を乗り入れることもできない。地域のお年寄りや大学の教え子、よそから訪ねてくる人たちと、多様な人々を迎える週末カフェだが、「効率が悪くて、これだけでは食べていけないビジネスモデルの典型」と、日高さん自身が笑う。しかし、この不便さや路地の狭さを、

できる貴重な場所」と読み解く。

夫妻が大切にしているのは、採算性の一言では表せない別の価値観だ。複数の仕事を持つことよって得られる、さまざまな人間関係と情報の回路。海風が心地よく通り抜ける木造の家や、テラスの窓から鮮やかに見渡せる小坪湾の眺めも、大切な役割を果たす。そこに、自立と自律の思考が重なっている。

超高層タワーより 低層の都市に余地がある

会社単位でそんな価値観の転換を実践しているのが、鎌倉市に本社のある「面白法人カヤック」だ。1998年に鎌倉が好きな学生時代の仲間3人が集まり、コンテンツ制作を中心に創業。14年には鎌倉市で初めて東証マザーズへの上場も果たしている。

同社のオフィスは、新築の低層社屋のほかに、元・銀行のビル、昭和時代の木造民家など、駅前に点在するさまざまな建物から成る。それらをつなぐ道路がオフィスの「廊下」だ。古い建物や空き家をまちのリソースとしてとらえ直し、鎌倉に在勤、在住する人が共同で使える「まちの社員食堂」「まちの保育園」など、コミュニティ施設も展開する。低層の建物が分散する鎌倉の都市形態が、ユニークなアクション



披露山の中腹から眺望できる「Minamicho Terrace」。窓からは海風が心地よく通り抜ける。テラスの窓から鮮やかに見渡せる小坪湾の眺めも、大切な役割を果たす。そこに、自立と自律の思考が重なっている。

ョンを支えているのだ。カヤックCEOの柳澤大輔さん(47)は言う。

「鎌倉では税金を納めている住民が、企業の株主のように発言権を持って、堂々とそれを行使している。行政も市民の声を聞く姿勢があつて、JR鎌倉駅周辺で高層ビルの建設を禁じている。そのバランスの中で古い町並みを守られて、僕らのような会社が発想力を使って、価値をさらに拡張していく。そういう循環が面白いですよ」

コロナ禍によるリモートワークの浸透によって、都心の超高層に対比する「郊外」自然環境「昔ながらの町並み」が、再び浮上していることは確かだ。この価値の変動は今後、もっと大きな流れになるだろうか。

都市政策を専門とする饗庭伸・東京都立大学教授(50)は、東京都の住民基本台帳のデータを使い、18年から20年9月末の行動変化を検証した。それによると、「郊外から都心への通勤・通学行動には数百万人の昼間人口の変動があつたが、都心から郊外へ居住地を移す大きな流れは認められなかった」。つまり、「かまらずよう」のような「ワークライフ」は、まだメジャーにはなっていないということだ。

ただし、それは、「大きな変化は起きない」ということではない。すでに数百万人規模の通勤・通学行動に変化が生じたことよって、これからは各自が都市を「カスタマイズ」する時代になっていくと、饗庭さんは予測する。「出社が抑制されることで、自宅、リモートオフィス、カフェなどが代わって仕事場になり、空き家や空き部屋をリモートやシェアオフィスに転用する動きも出た。個人がそれぞれの都合で時間と場所を編集できる。そんな余地のある都市が再評価されるでしょう。その場合、超高層ビルよりも、人がふらっと移動できる水平型の都市形態にアドバンテージがあります」

都市のカスタマイズとは、人が都市に「縛られ」「使われる」のではなく、人が都市を「使う」という望ましい未来のことだ。「かまらずよう」で進行する多様な「ワークライフ」が、社会にもたらす恩恵は大きい。